

「拡大EUを知る」第2回セミナー
「ラトビアの魅力」

日時：平成20年10月9日

場所：神戸国際協力交流センター

皆様こんにちは。ラトビア共和国特命全権大使ペーテリス・ヴァイヴァルスです。神戸に来ることができ大変嬉しく思っております。お忙しい中、足をお運びいただきありがとうございます。今日はみなさんに世界で最もきれいな国ーラトビアについてご紹介したいと思います。

さて、リガ市と神戸市は姉妹都市提携を結んで30年以上になりますが、今日はふたつの理由があり神戸を訪れました。まず一つ目は、11月18日は、ラトビア建国90周年記念日にあたるということ、そして二つ目は、近々リガ市長をはじめ、文化、ビジネスなど各方面から約70人の代表団が、来神する予定があるということです。さらに、11月8日から神戸の北野工房のまちで、「リガ芸術文化展」というイベントを開催されます。みなさん、ご興味がありましたら、是非イベントにご参加下さい。

ラトビアについて、既にご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、先程のVTRでは、私たちの国の文化と歴史をご紹介いたしましたが、やはり一番お伝えしたいことは、ラトビアと日本の共通点です。幾つかあります。まず、ラトビアと日本は隣国です。と申しますのも、日本とラトビアの間には、一カ国しかありません。地図をみるとよく分かりますが、日本から一番近い欧州連合の国はラトビアです。北欧、ドイツ、フランスなど馴染みのある国は、日本からもっと遠いところに位置しています。

ラトビアは、ラトビアの北側のエストニアと南側のリトアニアに挟まれており、3国並べてバルト三国と呼ばれています。バルト三国は隣国だけに、とてもよく似た国なのだろうというイメージがあると思いますが、実は全く違います。言語も違いますし、文化も違いますし、国自体も違います。言語で言いますとラトビア語とリトアニア語は似通っており、バルト語族の言語になります。言語学者によりますと、昔のサンスクリットまでさかのぼるといわれています。またラトビア語とリトアニア語は、ゲルマン語やスラブ語とは異なり、インド・ヨーロッパ語族の一派で、バルト語族に属しています。ある著名な大学の研究者によりますと、言語の起源について研究する場合、まずバルト語族の研究から始めるそうです。なぜかという、インドのサンスクリットにとっても近い言語なので、バルト語族について研究することから、言語の歴史がよくわかるのだそうです。次に北に位置しているエストニアですが、エストニア語はラトビア語やリトアニア語とは全く異なる言語で、フィン・ウゴル語派の言語です。起源は、アルタイ語族の言語で、日本語に近いか

もしれません。

ラトビア領土に最初の人類が現れたのはおよそ一万年前とされています。ラトビアの首都、リガは約800年以上前の1201年に創立されましたが、ラトビアは周囲を幾つもの大国に挟まれていたため、ラトビアの領土を支配する争いが起こりました。私たちの国は、ちょうど十字路のような場所に位置しており、現在のラトビアの形に落ち着いたのはさほど昔のことではありません。歴史上、ラトビアはポーランド、スウェーデン、ロシアそしてドイツに占領されてきました。しかし興味深いことに、現在のラトビアの最西端はクルゼメ地方ですが、17世紀には、クルランド公園と呼ばれており、非常に力を持ち植民地をふたつ持っていました。船を多数所持していたので、国としてとても強かったのです。その植民地は、カリブ海のドバゴ、そしてアフリカのガンビアという国でした。両国は、一時的にラトビアのクルランド公園の植民地でした。

18世紀に入り、ラトビアは経済的な繁栄を迎えます。ドイツや他のハンザ同盟に加盟している都市との貿易がさかんになり、同盟の中でも大きな都市のひとつになりました。このような状況の中、ラトビアが独立したのは、1918年の第一次世界大戦終結の年でした。その時、ロシア、ドイツはともに勢力的に弱かったので、バルト三国とフィンランドは独立を宣言することができました。よって独立記念日は、1918年11月18日としています。その後、ラトビアは独立国として日本を含め、国際社会に認められました。

独立後の1919年、アメリカによりラトビアの外交官が日本へ派遣されます。派遣されたヤーニス・オゾリンシュ氏は神戸に領事館をつくり、1919年から1920年までの間、関西学院大学で英語を教えました。ラトビアが正式に外交官を東京に派遣したのは、2006年のことで、我々が最初の外交官になります。日本の首都東京よりこちら関西神戸の方が、歴史的に見るとラトビアと関係が深いようです。

独立から20年の間、ラトビアはヨーロッパ諸国のなかで、経済的に発展した国のひとつとしてその地位を築きあげてきました。農業、工業、それから教育においても、他のヨーロッパ諸国を上回っていたこともあり、デンマーク、北欧諸国、ドイツ、イギリスなどと競争を繰り広げてきました。

1939年にドイツとソ連の二国により、ヨーロッパの分割方法が決めます。このことでラトビアの成長は止まってしまいました。ソ連とドイツの外務大臣の間で結ばれたモロトフ＝リッペントロップ条約には、秘密協定が含まれており、ヨーロッパの地図に赤い線をひいて互いの領土を決めたと言われています。その結果、バルト三国は1940年にソ連の軍隊により占領されました。バルト三国はもちろん反発をしますが、小国であったために抵抗できず、やむなく占領されてしまいます。ロシアと戦争を始め、唯一抵抗できたのは、フィンランドでした。その結果、フィンランドは占領を免れましたが、国土の10分の1が失われました。ドイツとソ連は当初、友好国として手を結んでいましたが、領土拡大の観点から互いの利害が一致しないようになりました。その結果、ヨーロッパの分断が難しくなり、第二次世界大戦が始まりました。

ラトビアは、1940年にソ連に占領され、翌41年にはドイツ、そしてさらに44年にはドイツからソ連へと引き渡され、再びソ連に占領されました。ソ連の支配はその後ソ連が1990年に崩壊するまで続き、1991年に再びバルト三国は独立しました。独立後の目標は、欧州連合（EU）と北大西洋条約機構（NATO）に加盟することでした。その後10年の間、ラトビアでは国際社会への復帰を目標に様々な改革が行われ、史上例を見ない程の勢いで、共産主義国家から資本主義国家へ、そして社会主義から民主主義へと変革を遂げ、経済的にも著しい成長を記録しました。

2004年にラトビア、リトアニア、エストニアは、EUとNATOへの加盟を果たしました。バルト三国にとって、2004年という年は、非常に大切な年となりました。

以降ラトビアは様々な分野、領域において輝かしい成長を遂げています。国際社会においても以前のような立場に復帰できるよう、良き友達、良きパートナーを探して、これからも成長を続けてまいりたいと思います。

現在、私たちは世界的な経済低迷期を迎えています。日本やラトビアにも影響が全くないとは言えないですが、日本とは良きパートナーとして、親密な関係を築いていきたいと思っています。神戸で開催される「Riga Days in Kobe」というイベントもラトビアと日本の友好関係の発展に貢献するでしょうし、また神戸だけでなく、大阪や東京でのイベントもありますので、友好関係を結んでいける可能性はたくさんあるのではないかと考えています。

ラトビアについてご紹介するのに1時間では足りないですね。まして通訳も入れますとお話できる時間は半分近くになってしまいます。今日は、私からの一方的なお話だけではなく、みなさんからの質問にもたくさんお答えしたいと思いますので、ご遠慮なく質問してください。

ご清聴、誠にありがとうございました。

どうぞ質問がある方。

Q：過去の歴史から振り返っても、プーチン政権が存続する限り、不安がありますか。

まだユーロに加盟していませんが、いつ加盟しそうですか。

2番目の質問からお答します。この講演の2日前に、ラトビア中央銀行の総裁がユーロ導入についてコメントを発表しました。国際経済の観点から必要なプロセスを踏まえたうえで、おおよそ2012年にはユーロの導入が可能になりそうです。現在のラトビアの通貨であるラツは、固定相場制をとっていますので、ユーロに切り替えるということは、技術面での導入に近い感じですね。

ラトビアとロシアの関係については、またもう一度別のセミナーを開かなければならない程、ボリュームがあります。もちろん隣国ですので両国間の関係は重要です。ラトビアや日本にとっては、ロシアがより予測可能になると理想的であると思います。これは政治

的な夢ですが、今現在は、ロシアとの経済関係が深まってきています。ロシアは経済的な基盤があり、ラトビアはその基盤を利用させてもらいながら、うまく互いに利益がでるような取引をしています。

グルジアの件では、バルト三国とポーランドの大統領が最も早くグルジアへのサポートを示し、北京オリンピック開催時には、バルト三国については2ヶ国の大統領とラトビアの首相、そしてポーランドの大統領が、グルジアの首都トビリシを訪れ、グルジアの市民にサポートを表明しました。

またビジネスの観点から言いますと、日本の企業がロシアへの進出を検討している場合、進出のサポートとしてこれまでラトビアが培ってきたロシアに関する知識、経験が有効活用できるのではないかと考えています。ラトビアは経済的、政治的にも安定しており、また他のEU加盟国に比べ、ロシアとの関わりが深いといえます。これまでの経験から、ロシア人の考え方やメンタリティーを理解することができますし、また大多数のラトビア人はロシア語が堪能です。日本の大手自動車メーカーでは、日産、トヨタ、マツダなどがロシアへの進出を検討しているようです。あるいは、中小企業であれば、ロシア市場に進出するため、ラトビアの経験を有効活用していただくというのはいかがでしょうか。フランス人、ドイツ人、イギリス人は、ロシア人のメンタリティーについてラトビア程は詳しくなく、またロシア語もさほど堪能でないケースも見受けられます。

以上、ロシアについてお話したいことはまだまだありますが、時間も限られていますのでこれで終わりにします。

Q: 他に質問がありますか。

日本からの観光客は増えていますか、それからラトビアの魅力というか、見どころはどこでしょうか。おいしい食べ物はなんでしょうか。

全部の質問に対して、「ハイ」と答えましょう。日本人の観光客の数は、2007年に比べて、20%増加しました。今年の予想数は9,000~10,000人ほどでまだまだ少ないですが、徐々に増えています。

先月、お台場でJATAによる世界旅行博が開催されましたが、多くの日本の旅行会社の方たちがラトビアのブースを訪れていて、そのことに非常に興味を持ちました。

その他、今年初めて日本の世界一周クルーズの船「にっぽん丸」がラトビアに就航し、来年は「飛鳥」も就航する予定です。また他の大手クルーズ会社とも話を進めている段階ですし、来月にはラトビアから政府観光局の局長が来日し、JTBと業務委託契約を結ぶ予定です。JTBから新しい旅行企画などが出てくるのではないかと期待しています。

ラトビアの魅力ですが、一番の見どころはやはり大自然です。ラトビアは国土の半分以上が森林に覆われており、ヨーロッパ内の人口密度を見ると、フィンランドの次いで低いことが分かります。そのため、自然がとてもきれいに保たれています。また先日新聞で、

日本にいる10羽のコウノトリについて書かれている記事を読みました。ラトビアでは夏になると何十万羽もやって来ます。

その他、ラトビアの主都リガは世界ユネスコ遺産に登録されており、建築物でとても有名です。世界的に有名なイタリアの建築家バルトロメオ・ラストレッリは、サンクトペテルブルグ（ロシア）にある冬の宮殿を手掛けたことで知られていますが、ラトビアでもふたつの大きな宮殿、ルンダーレ城とイエルガヴァ城の建築を手掛けました。

最後にラトビアの料理ですが、ドイツ料理によく似おり、伝統的な料理がいくつかあります。しかしラトビアでは、世界各国の料理を食べることができます。日本食のレストランも10か所以上ありますので、日本人と同じように、ラトビアでお刺身を食べることもできます。種類は日本と比べると少ないですが、サーモンとマスを生で食べます。

Q: エネルギーについてお聞きしたいのですが、ラトビアは、面積が狭い国で大きな川とか山がないので、水力発電がないのではと思います。1982年に初めてラトビアに行った時は、ソ連邦の時代で、ソ連から電気とかオイルをもらっていると聞いたのですが、現在は独立してどのようにしてエネルギーを確保されていますか。

日本と同じように、エネルギーの確保はラトビアにとって大きな課題です。現在はほとんどのエネルギーを輸入しています。電気に関して述べると、60%を水力発電で賄っており、不足分をリトアニアやエストニアの原子力発電所から輸入しています。

石油については、リトアニアとロシアからほぼ100%輸入しています。ウクライナとベラルーシでは石油・天然ガスが止まったことがあります。そのようなことはラトビアでは起こりません。なぜかといいますと、何年も前から国際価格で購入しているからです。ウクライナとベラルーシは、国際価格ではなく、石油・天然ガスを特価で輸入しています。続いてガスですが、こちらは100%ロシアに依存しています。ラトビアでは、ロシアから購入した天然ガスを地下に貯蔵し、それを冬場になるとロシアに輸出し、蓄代もらっています。両国は互いに依存しあっており、特にガスに関する問題も起こっていません。

エネルギー分野においては、二つの大きなプロジェクトがあります。ひとつは新しい原子力発電所の建設です。具体的には、リトアニアにある古い原子力発電所を閉鎖し、新技術を使った原子力発電所をバルト三国とポーランドの4か国で建設する予定です。また、ロシアへの依存度を軽減し、供給源の多様化を図るため、液化天然ガス（LNG）プラントの建設も予定しています。この二つのプロジェクトを進めていくにあたり、日本の技術は世界でトップレベルですから、日本との協力も考えられます。